

「第三章 信用制度のもとでの流通手段」の概要

「第三章」の抜粋

流通手段の節約

P666

「流通手段を節約する方法はすべて信用にもとづいている。」

「そのほかの諸事情も流通手段の節約に寄与した。すなわちペニー郵便料金や鉄道や電信など、要するに改良された交通手段がそれである。こうして、イングランドは今日ではほぼ同じ銀行券流通高で五倍から六倍の取引をすることができるのである。」

P667

「流通手段として流通する貨幣の速度は、まったく、売買の流れに、または、支払が次々に貨幣で行なわれるかぎりでは支払の連鎖に、かかっている。」

流通手段の量

P668

「現実に流通する貨幣の量は、流通の速度と諸支払の節約とを与えられたものとして前提すれば、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されている。同じ法則は銀行券流通の場合にも支配する。」

P671

「流通銀行券の量は取引上の必要に適應するのであって、余分な銀行券はすべてただちにその発行者のもとに帰ってくるのである。」

P673

「銀行券の流通は、イングランド銀行の意志にはかかわりがないように、これらの銀行券の兌換可能性を補証する銀行地下室内の金準備高にもかかわりがない。」

P674

「だから、流通貨幣——銀行券と金——の量に影響するものは、ただ取引そのものの要求だけである。」

P676 エンゲルスの挿入文

「前貸をしてもその還流が規則的に行なわれて信用にも動揺が起きないというような商況が続くかぎり、流通の膨張収縮はただ産業家や商人の必要に適合することになる。……恐慌が突発すれば、問題はただ支払手段だけである。……市場にある支払手段すなわち銀行券を求めてほんとうの障害物競走が始まる。だれもが手に入れられるだけの銀行券をしまいこんでしまい、こうして、銀行券はそれが最も必要とされるその日に流通から姿を消してしまう。」

通貨の流通量と利子率

P679

「通貨の絶対量が利子率に規定的に作用するのは、ただ逼迫期だけのことである」

P680

通常は、「通貨の絶対量は利子率には影響しない。なぜならば、この絶対量は——通貨の節約や速度を不変と前提すれば——第一には、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており（といってもたいていの場合一方の契機は他方の契機的作用を麻痺させるので

あるが)、また最後に信用の状態によって規定されているが、逆にそれが信用の状態を規定するのではけっしてないからである。また、第二には、商品価格と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないからである。」「利子率は流通貨幣量にはかかわりがないのである。」

投機の時期の高い利子率

P685-686

「この二人(チャップマンとウイルソン——青山)が忘れてるのは、高い利子率は、一八五七年にそうだったように、信用の遍歴騎士たちが国を不安にしていることの証拠でもありうるということであって、この騎士たちが高い利子を支払うことができるのは、彼らはそれを他人のポケットから支払い(しかしそれによってすべての人々にとっての利子率の決定を助ける)、その間、見込み利潤で景気よくやって行けるからである。同時に、まさにそのために製造業者などにとっても実際に非常に有利な取引ができるようになることもありうるのである。還流は前貸制度によってまったく詐欺的なものになる。」

恐慌のときの貨幣と手形

P689

「恐慌のときには信用主義から重金主義への急展開が起きるのである。」「世界市場貨幣の蓄蔵は」、「信用貨幣すなわち銀行券の兌換性の保証として役だった。」

P691

「金の流出による金属準備が減少すれば(それにともなって入ってくる銀行券は廃棄されるので——青山)それだけ恐慌を激化させるのである。」

P695

「手形の流通量は、銀行券のそれと同じに、まったくただ取引上の必要によって規定されているのである。……ただ貨幣の不足な時期に…このような時期には手形の量がふえて質がわるくなるのである。最後に、恐慌時には手形流通はまったくだめになる。」

イングランド銀行の「資本」の創造とその力

P697

「イングランド銀行がその地下室にある金属準備によって保証されていない銀行券を発行するかぎりでは、この銀行は価値章標を創造するのであって、この章標は単に流通手段を形成するだけでなく、この銀行にとってはこの無準備銀行券の名目額だけの追加の——架空のだとはいえ——資本をも形成するのである。」「同じことは、もちろん、銀行券を発行する個人銀行にもあてはまる。」「さらに、銀行はそのほかにも資本を創造する手段をもっている。」

P698

「イングランド銀行の力は、この銀行が利子の市場率の調節を行なうことに現れている。」

P700

「そして、ガーニたちが事業の窮境を遠慮なく利用してうまい汁を吸っているとき、イングランド銀行は同じように自由にそれをやることはできないにしても、この銀行にとってもまたかなりの利潤が落ちてくるのである。」

P701-702

「さらに集中について述べなければならない！いわゆる国立銀行とそれを取り巻く大きな

貨幣貸付業者や高利貸しを中心とする信用制度は、巨大な集中であって、それは、この寄生階級に、単に産業資本家を周期的に滅殺するだけでなく危険きわまる仕方現実の生産に干渉もする法外な力を与えるのである——しかもこの仲間は生産のことはなにも知らず、また生産とはなんの関係もないのである。」

「第三三章」の概略

流通手段の節約

流通手段を節約する方法はすべて信用にもとづいている。しかし、流通手段として流通する貨幣の速度は、まったく、売買の流れに、または、支払が次々に貨幣で行なわれるかぎりでは支払の連鎖に、かかっているので、改良された交通手段も流通手段の節約に寄与する。

流通手段の量

現実に流通する貨幣と流通銀行券の量は、流通の速度と諸支払の節約とを与えられたものとして前提すれば、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており、流通銀行券の量は取引上の必要に適應するのであって、余分な銀行券はすべてただちにその発行者のもとに帰ってくる。だから、流通貨幣——銀行券と金——の量に影響するものは、ただ取引そのものの要求だけであり、銀行券の流通は、イングランド銀行の意志にはかかわりがないように、これらの銀行券の兌換可能性を補証する銀行地下室内の金準備高にもかかわりがない。

通貨の流通量と利子率

通常は、通貨の絶対量は利子率には影響しない。なぜならば、この絶対量は——通貨の節約や速度を不変と前提すれば——第一には、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており、信用の状態によって規定されているが、通貨の絶対量が信用の状態を規定するのではけっしてないからであり、第二には、商品価格と利子とのあいだにはなにも必然的な関連はないからである。だから、通常は、利子率は流通貨幣量にはかかわりがないのである。

通貨の絶対量が利子率に規定的に作用するのは、ただ逼迫期だけのことである。

投機の時期の高い利子率

信用の遍歴騎士たちが高い利子を支払うことができるのは、彼らはそれを他人のポケットから支払い、その間、見込み利潤で景気よくやって行けるからである。還流は前貸制度によってまったく詐欺的なものになるが、まさにそのために製造業者などにとっても実際に非常に有利な取引ができるようになることもありうるのである。

恐慌のときの貨幣と手形

手形の流通量は、銀行券のそれと同じに、まったくただ取引上の必要によって規定されているが、貨幣の不足な時期には手形の量がふえて質がわるくなり、恐慌時には手形流通はまったくだめになる。

恐慌が突発すれば、市場にある支払手段すなわち銀行券を求めてほんとうの障害物競走が始まる。だれもが手に入れられるだけの銀行券をしまいこんでしまい、こうして、銀行券はそれが最も必要とされるその日に流通から姿を消してしまう。

恐慌のときには信用主義から重金主義への急展開が起きるのである。

世界市場貨幣の蓄蔵は、信用貨幣すなわち銀行券の兌換性の保証として役だつが、金の流出による金属準備が減少するのに連動して、それにもなつて入ってくる銀行券を廃棄すれば、それだけ恐慌を激化させることになる。

イングランド銀行の「資本」の創造とその力

イングランド銀行が金属準備によって保証されている以上に銀行券を発行する場合、それは価値章標を創造することになり、単に流通手段を増やすだけではなく、——架空のだけとはいえ——資本をも形成するのである。同じことは、もちろん、銀行券を発行する個人銀行にもあてはまる。さらに、銀行はそのほかにも資本を創造する手段をもっている。

イングランド銀行の力は、この銀行が利子の市場率の調節を行なうことに現れている。

さらに集中について述べなければならない！

いわゆる国立銀行とそれを取り巻く大きな貨幣貸付業者や高利貸しを中心とする信用制度は、巨大な集中であつて、それは、この寄生階級に、単に産業資本家を周期的に滅殺するだけではなく危険きわまる仕方で行実の生産に干渉もする法外な力を与えるのである。しかもこの仲間は生産のことはなにも知らず、また生産とはなんの関係もないのである。

「第三章」の要約と現代の私たちが留意すべき点

「第三章」の要約

流通手段の節約と流通手段の量と利子率

流通手段を節約する方法はすべて信用にもとづいている。しかし、流通手段として流通する貨幣の速度は、売買の流れに、支払の連鎖にかかっているため、改良された交通手段も流通手段の節約に寄与する。

現実に流通する貨幣と流通銀行券の量は、流通の速度と諸支払の節約とを与えられたものとして前提すれば、諸商品の価格と諸取引の量とによって規定されており、ただ取引そのものの要求に応ずるのであつて、余分な銀行券はすべてただちにその発行者のもとに帰ってくる。だから、銀行券の流通は、イングランド銀行の意志にはかかわりがなく、これらの銀行券の兌換可能性を補証する銀行地下室内の金準備高にもかかわりがなく、

通常は、通貨の絶対量は利子率には影響しない。通貨の絶対量が利子率に規定的に作用するのは、ただ逼迫期だけのことである。

投機の時期の高い利子率

信用の遍歴騎士たちが高い利子を支払うことができるのは、彼らはそれを他人のポケットから支払い、その間、見込み利潤で景気よくやっけて行くからである。還流は前貸制度によってまったく詐欺的なものになるが、まさにそのために製造業者などにとつても実際に非常に有利な取引ができるようになることもありうるのである。

恐慌のときの貨幣と信用

手形の流通量は、銀行券のそれと同じに、まったくただ取引上の必要によって規定されているが、貨幣の不足な時期には手形の量がふえて質がわるくなり、恐慌時には手形流通は不能になる。恐慌が突発すれば、市場にある支払手段を求めてほんとうの障害物競走が始まり、だれもが手に入れられるだけの銀行券をしまいこんでしまう。こうして、銀行券はそれが最も必要とされるその日に流通から姿を消してしまうのである。恐慌のときには信用主義から重金主義への急展開が起きる。

世界市場貨幣の蓄蔵は、信用貨幣すなわち銀行券の兌換性の保証として役だが、金の流出による金属準備が減少するのに連動して、それにもなつて入ってくる銀行券を廃棄すれば、それだけ恐慌を激化させることになる。

イングランド銀行の「資本」の創造とその力

イングランド銀行が金属準備によって保証されている以上に銀行券を発行する場合、それは、単に流通手段を増やすだけではなく、架空のどとはいえ、資本をも形成する。同じことは、もちろん、銀行券を発行する個人銀行にもあてはまる。さらに、銀行はそのほかにも資本を創造する手段をもっている。

イングランド銀行の力は、この銀行が利子の市場率の調節を行なうことができることに現れている。

さらに集中について述べなければならない！

いわゆる国立銀行とそれを取り巻く大きな貨幣貸付業者や高利貸しを中心とする信用制度は、巨大な集中であつて、それは、この寄生階級に、単に産業資本家を周期的に滅殺するだけではなく危険きわまる仕方で現実の生産に干渉もする法外な力を与えるのである。しかもこの仲間は生産のことはなにも知らず、また生産とはなんの関係もないのである。

現代の私たちが留意すべき点

「投機の時期の高い利子率」に関しては、先の『第三二章』の要約と現代の私たちが留意すべき点」で述べたのもう一度参照して下さい。

関連して、エンゲルスの挿入文に、つぎのような文章があります。

「恐慌が突発すれば、問題はただ支払手段だけである。……市場にある支払手段すなわち銀行券を求めてほんとうの障害物競走が始まる。だれもが手に入れられるだけの銀行券をしまいこんでしまい、こうして、銀行券はそれが最も必要とされるその日に流通から姿を消してしまう。」(P676)

この「エンゲルスの挿入文」そのままの事態が二一世紀になって起こりました。それは、2008年9月15日に米証券大手リーマン・ブラザーズ(総資産約60兆円)が経営破綻し、それをきっかけに、世界経済が「100年に一度」の「危機」に見舞われたときです。

日本銀行は、いつも通り、9月16日～17日に定例の金融政策決定会合を開き、金融政策の現状維持を全員一致で決めます。しかし、日銀は、その翌日、18日の午後3時から臨時会合を開き、白川日銀総裁は「非常に急なことでまことに申し訳なかった」と言つて頭を下げます。日銀が通常の会合を終えたその翌日に再び政策委員を招集するのは、歴史上初めてのことです。中曽市場局長は「市場にショックの波が走っている。ドル資金の極端な抱え込みが市場を逼迫させている」と、市場でドルが枯渇するという異常事態が起きていることを説明します。この会合で、日米欧の主要6中銀で総額約19兆円のドル資金を市場に供給する協調策に日本銀行が参加することを決定し、白川総裁は「日本の金融機関の外貨繰りが急に逼迫している印象は絶対に与えない」と力を込めたという。※この文章は、日銀が2019年1月29日に2008年7～12月の金融政策決定会合の議事録を公開したのにもなう『日本経済新聞』(2019年1月30日付け朝刊)の「特集」記事に依拠しています。

この時のトラウマがグローバル資本に内部留保を増やさせたという者もいます。

リーマン・ショックは、信用・「架空の資本」による錬金術にもとづく需要創出とそれ無しには十分な経済の発展が図れない経済システムの矛盾を白日の下に晒しだしました

が、残念ながら日本の「革命党」にはマルクス・エンゲルスのような感受性と理性とエネルギーをもった指導者はいませんでした。

第三三章を学び、実物経済と貨幣の量との関係をしっかり理解して、「諸商品の価格と諸取引の量」が同じなかで「通貨の絶対量」を拡大するアベノミックス・日銀の「量的緩和」政策をみると、それは、貨幣資本の過剰をもたらしまネーゲームの基盤を拡大させるだけで経済を根本から強くするものではないことがよく分かります。マルクスの言う「寄生階級」の力を強め、資本主義的生産様式を「貨幣貸付業者や高利貸し」が儲かるようになりますます歪めるだけです。